

〈 特 集 〉

キリシタンの跡をたどる

— バチカン図書館所蔵マレガ収集文書の発見と国際交流 —

特集にあたって

大友 一 雄

本特集は、2015年9月12日、バチカン聖ピオ10世ホールにおいて開催されたシンポジウム「キリシタンの跡をたどる—バチカン図書館所蔵マレガ収集文書の発見と国際交流」での成果をもとに、さらに検討を加え発表するものである。特集を組むにあたってタイトルを変えることも考えたが、関連性を確保するためにシンポジウム・タイトルをそのまま用いることにした。ここではプロジェクトについて紹介したうえで、シンポジウムの狙いや各報告の課題を明らかにしたい。

バチカン図書館と人間文化研究機構は、バチカン図書館が所蔵する日本近世のキリシタン禁制に関する膨大な文書群の資源化をはかり、広く世界に発信するためのプロジェクトを発足させた。同研究機構は日本関連在外資料調査研究事業「バチカン図書館所蔵マリオ・マレガ収集文書の保存・公開に関する調査研究」（代表大友一雄）による調査研究事業として位置づけ、バチカン図書館とは2013年11月に協定を締結した。実行統括は、国文学研究資料館が担当し、国内からは東京大学史料編纂所・大分県教育委員会（県立先哲史料館）が協力機関として、また、内外の日本研究者、キリシタン研究者、史料保存関係者などが参加する。

プロジェクトの主たる活動は、（1）大半が未整理状態にある文書群の基礎的調査を実施し、図書館での文書の保存管理と公開体制の整備を実現すること、（2）文書全点を撮影し、それによる目録作成、画像データベースのウェブ公開することを基本的な事業とし、これらの実現に関わって、（3）文書群を収集したマレガ神父の研究や、文書群そのものに関する研究、日本のキリシタン研究など、基礎的研究を並行して進めることにある。

これまでの調査によって、全体数量は当初見込みの1万点を超えることが確実となり、その内容が17～19世紀の日本のキリシタン禁制と住民の人口管理について、その全体状況を解明できる稀有な文書群であること、その出所は多くが九州豊後の臼杵藩庁であることなどが明らかになってきた。文書群は大半が未整理状態であり、臼杵藩庁時代の文書管理の状態を残している。また、一部についてはマレガ神父が『豊後切支丹史料』（正・続、1942・1946年刊）を刊行した際の状態が温存されている。よって原秩序を尊重し、現状記録に努めながら作業を進めつつある。また、保存と撮影では、バチカン図書館が中心となり日本史料の補修や画像作成（デジタル化）などを進めているが、これらは技術協力面での交流などによる成果といえる。今後、史料の内容分析、目録作成などの活動でも、相互的な取り組みによる成果が期待される所であり、アーカイブズをめぐる実践的国際交流の一層の拡がりも期待される。

さて、プロジェクトでは、調査研究に関わる成果の一端を研究会などを通じて公表することに努めてきた。2014年11月1日には、大分県臼杵市でシンポジウム「バチカン図書館所蔵マレガ神父収集豊後キリシタン文書群の魅力」を開催した。今回のシンポジウムはプロジェクト

による第2回目の研究集会であった。

シンポジウムでは、キリスト教布教と禁教、文書群の流転、マレガ神父の活動、そして文書群の共同調査・研究など、キリスト教をめぐる多岐にわたる時代を超えた「交流」に注目して、基調報告1本と、研究報告3本を準備した。

大橋基調報告は、16～19世紀に至る日本のキリシタン禁制の時代に、信仰を続けた人々がいたことに注目して、日本におけるキリスト教の受容と共生の構造について、社会の特徴などを踏まえて論じる。異文化との共生が大きな課題となる現代、前近代の日本キリシタンの特徴を比較文化的な視点などで論じることを試みたものである。

佐藤報告は、マレガ収集文書の分析を通じて、キリスト教の伝来と受容が、日本の近世権力にどのような対応を必然化させたのか、キリシタン禁制のシステムが、共同体や地域的な結合を相互監視の仕組みとして利用し成立した過程を明らかにする。今後、禁制システムの史的展開を考察するうえでも基本的な成果といえる。マレガ収集文書群は、その性格からこの方面の研究においてもっとも大きな情報を提供することは確実である。

さて、1865年、日本での隠れキリシタンの発見は欧州社会に伝えられ、日本への関心が一挙に高まる。20世紀の布教活動はこうしたなかで準備されたともいえる。シルヴィオ・ヴィータ報告は、これらの位置付けにも留意しながら、バチカン図書館へ切支丹文書群を寄贈したサレジオ会宣教師マレガ神父の経歴・活動を、新たな史料分析を通じて明らかにする。バチカン図書館のものはもちろん、サレジオ大学図書館所蔵マレガ・コレクションに含まれる家族宛の書簡調査、神父が関係した日本の教会や関係者への聞き取り作業などによる成果である。これまで曖昧な点が少なくなかった神父のライフヒストリーを確実な史料で跡付けた成果であり、プロジェクトにとっての基礎的な研究と位置づけられる。

また、アンヘラ報告は、バチカン図書館にもたらされたマレガ収集文書群が現在の我々に課した、日本とバチカン、さらには欧州との交流について、とくに史料保存の観点から言及したものである。史料の修復保存技術に関する日欧の技術・人材交流(=コラボレーション)の成果を、具体的な調査方法とともに紹介する。

以上の16世紀末から現代までの4つの報告では、異なる文化・宗教との接触・受容、そして排除や弾圧なども含めてひとつの「交流」として捉えて、交流が有する影響や可能性について直接的また間接的に論じることを試みた。キリスト教が取り結んだ様々な交流を通じて、歴史や文化、そして現代を論じることを試みたものである。

なお、シンポジウムは、主催バチカン図書館・人間文化研究機構(国文学研究資料館)、共催東京大学史料編纂所・大分県教育委員会(大分県立先哲史料館)が中心になり、ローマ日本文化会館(国際交流基金)、サレジオ大学・イタリア国立東方学研究所の協力を、在バチカン日本大使館・ローマ大学・ヴェネツィア大学・ナポリ東洋大学・伊日研究学会の後援を受けて開催したものである。とくに在バチカン日本大使館から大きな協力を頂戴したことを明記したい。